

## 関帝信仰と周倉

その他のタイトル	Guangong belief and Zhou Cang
著者	二階堂 善弘
雑誌名	関西大学東西学術研究所紀要
巻	47
ページ	71-85
発行年	2014-04-01
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/8431">http://hdl.handle.net/10112/8431</a>

# 関帝信仰と周倉

二階堂 善 弘

## Guangong belief and Zhou Cang

NIKAIDO Yoshihiro

When you visit a Guandi Temple (Guandi *miao*), regardless of whether it is in China or other places, we almost certainly find a trio of images: the majestic, red-faced Guan Yu, flanked by the white-faced and graceful youth, Guan Ping, and the imposing, black-faced Zhou Cang, brandishing his blue-dragon halberd. It has often been pointed out that while Guan Yu and Guan Ping actually existed, Zhou Cang cannot be found in the historical record. Hu Xiaowei has hypothesized that Zhou Cang has his origins in a figure from the Zhejiang region known as Zhou Jiangjun (General Zhou). It is thought that in Zhejiang, Zhou Xiaozhi was also known as Zhou Jiangjun and became the object of a certain cult following. But it has been difficult to establish the connection between this deity and Guandi. The author suggests that a passage in the text *Daofa huiyuan* referring to a character named Zhou Chang Jiangjun may be a prototype for the figure of Zhou Cang.

## 1. 関帝信仰の発展と研究

関帝は現在、おそらく中華の人々に最も広く信仰されている神である。これに匹敵すると言えるのは観音信仰のみであると考えられる。媽祖信仰も広範に行われているが、これは大陸では南方に偏っている。華北地方では碧霞元君信仰の方が強いので、中国全体から見れば、全国的に遍くという形ではない。それに比して、関帝信仰は中国大陸全土で行われ、さらに台湾・香港でも数多くの廟を有している。廟や道観だけではなく、寺院にも伽藍神として配されるのが常である。またマレーシア・タイ・シンガポール・ベトナムなどにおいても、おびただしい数の媽祖廟と関帝廟が存在する。韓国のソウルにも関王廟があり、日本にも長崎の唐寺をはじめとして、横浜・神戸などの各地の関帝廟で広く祀られている。まさに中華を代表する神となっている。



大阪関帝廟の関帝像

しかしながら、このように関帝が広く祀られるようになったのは、明清期以降のことである。特に清代では、朝廷が関帝信仰を奨励した面が強く影響している。

関帝信仰がどのように発展してきたかについては、これまで数多くの研究者が詳細に論じてきた。早期には1972年に黄華節氏の『関公の人格与神格』<sup>1)</sup>が専著として出されたが、その後も陸続と出版が重ねられ、書架を占有するほどの量となっている。近年の注意すべき著作だけで

1) 黄華節『関公の人格与神格』(台湾商務印書館 1972年)

も、顔清洋氏の『関公全伝』<sup>2)</sup>、蔡東洲・文廷海両氏の『関羽崇拜研究』<sup>3)</sup>、洪淑苓氏の『関公民間造型之研究』<sup>4)</sup>、盧曉衡氏主編の『関羽・関公和関聖』<sup>5)</sup>、渡邊義浩氏の『関羽』<sup>6)</sup>など、いずれも数百頁に及ぶ大作となっている。



洛陽関林の周倉・関帝・関平

2005年、これまでの研究を集大成する形で、中国社会科学院の胡小偉氏により、『関公信仰研究系列』が出版された。『伽藍天尊』『超凡入聖』『多元統一』『護国佑民』『變理陰陽』の5巻にわたり、250万字以上に及ぶ巨冊である<sup>7)</sup>。その淵源から近代の発展に至るまで、関帝信仰の発展については、かなり述べ尽くされた感はある。むろん、細かい問題は残ってはいるものの、関帝信仰それ自体については、論ずる余地は小さくなっている。

本論ではすでに多くの研究がある関帝自身ではなく、その脇侍である周倉について検討する。筆者はかつて『三国志平話』の訳注作業において、簡単に周倉の来源についてふれたもの<sup>8)</sup>、論としてまとめるには至ってなかった。また胡小偉氏が『伽藍天尊』の「周倉考」において、新たに周倉の起源について論じたが、それをふまえた論議が必要になったということもある。

2) 顔清洋『関公全伝』(台湾学生書局 2002年)

3) 蔡東洲・文廷海『関羽崇拜研究』(巴蜀書社 2001年)

4) 洪淑苓『関公民間造型之研究——以関公伝説为重心的考察』(台湾大学出版委員会 1995年)

5) 盧曉衡主編『関羽・関公和関聖』(社会科学文献出版社 2002年)

6) 渡邊義浩『関羽——神になった「三国志」の英雄』(筑摩書房 2011年)

7) 胡小偉『関公信仰研究系列』(科華図書出版公司 2005年)

8) 二階堂善弘・中川論『三国志平話』(コーエー 1999年)

## 2. 周倉について

中国でもその他の土地でも、とにかく関帝廟に行けば、中心に威風堂々とした赤い顔の関羽、そして両隣に、秀麗な青年で白い顔の関平、黒い顔に青龍刀を捧げ持つ魁偉な周倉、この三者が組み合わされているのを必ずと言ってよいほど見る事ができる。もっとも、各神の顔の色や持ち物は、廟によって変わることも多い。

関羽と関平が実在の人物であるのに対し、周倉が史実に見えない人物であることに関しては、すでに多くの指摘がある。古くは紀昀がこれについて論じている<sup>9)</sup>。

関帝祠中、皆塑周將軍、其名則不見于史伝。考元魯貞『漢壽亭侯廟碑』已有乘赤兔兮、從周倉語。則其來已久矣。

これによれば、すでに元の時代には周倉が関帝の脇侍として定着していることが判明する。むしろ、現在の周倉の形象については、ほぼ『三国志演義』がその典拠となっている。『三国志演義』の周倉の登場場面は次の通りである<sup>10)</sup>。

正説話間、遙望一彪人馬來到。元紹曰、「此必周倉也」。関公乃立馬待之。果見一人、黒面長身、持槍乘馬、引衆而至、見了関公、驚喜曰、「此関將軍也」。疾忙下馬俯、伏道傍曰、「周倉參拜」。関公曰、「壯士何処曾識関某來」。倉曰、「旧隨黄巾張宝時、曾識尊顔、恨失身賊党、不得相隨。今日幸得拜見。願將軍不棄、収為步卒、早晚執鞭隨鐙、死亦甘心」。公見其意甚誠、乃謂曰、「汝若隨我、汝手下人伴若何」。

『三国志演義』では、周倉は黄巾の賊党に属していたが、後に裴元紹と共に山にこもっていた。曹操の厚遇を退けて劉備のもとへ向かう関羽に付き従い、その後は関羽の部将となる。関羽と魯肅が話し合う「単刀会」では大いに活躍する場面がある。関羽と関平が呉軍に捕らえられて斬首されると、その死に殉ずることとなった。

9) 紀昀『閱微草堂筆記』卷五、なお古典文献の引用に関しては、基本的に電子データを使用している。関西大学アジア文化研究センターCSAC所蔵の愛如生『基本古籍庫』、凱希メディアサービスの『道蔵』、さらに台湾中央研究院の『漢籍電子文献』などである。

10) 『三国志演義』第二十八回

関羽はその後神となるが、周倉もまた従神として常に関帝の傍らに在ることとなった。明の小説『三宝太監西洋記』には、神としての関羽と周倉が登場する場面がある<sup>11)</sup>。

天師道、「万夫之勇不足、一夫之智有余。関元帥、你還在智不在勇」。関元帥道、「小神知道」。一駕雲頭而起、叫声、「周倉何在」。周倉応声道、「有」。関元帥道、「你去叫過木骨都東國的当方土地来」。周倉応声道、「是」。即時間叫過一個矮老子来見関爺。関爺道、「你做個土地之神、怎麼容留這等一個妖和尚、在這裏抗拒天兵、你得何罪」。土地道、「非干小神之事。本处還有個番城隍菩薩該管地方、小神只在這裏当土地、全沒些權」。

ここでは関羽は元帥神の一人である。温・関・馬・趙の道教四大元帥としての関羽の姿はやや古い層に属する。とはいえ、この場面でも周倉が関羽の配下の神として在ることは変わらない。

もっとも『三国志演義』以前の周倉については、関羽に殉ずる説話があったかどうか判定するのは難しい。『三国志演義』の前身である小説『三国志平話』には、諸葛亮の北伐の頃に周倉が登場する場面がある<sup>12)</sup>。

後説司馬懿昇帳而坐、与衆官評議。元帥言、「自古及今、未曾見諸葛為帥、無計可料」。又数日、元帥師行、離寨無三里、見漢将周倉使木牛流馬運糧、使步陟将鄧艾引軍三陟千、奪木牛流馬十数支。元帥令營内木匠拆開木牛流馬、觀長短高下、尺寸方円、依法造数百余支、令人提木杵打一下、可行数步、司馬懿言曰、「諸葛木牛流馬、打一杵可行三百步、上路運糧、在寨内聽的聽的打不動。諸葛別有甚法」。又数日、見護将三百軍赴寨前、周倉帶酒、高叫元帥、「軍師交我下戰書来、迎敵見贏輸。不戰即合納降。爾為魏之名将、何為閉門不出」。元帥言、「周倉帶酒」。令左右人取酒与周倉吃、吃的大醉。司馬言、「多与金珠財宝、諸葛木牛流馬、打一杵可行三百余步。我造木牛流馬、打一杵只行数步。有甚法度、你說与我、我与你万万貫金珠、可受滿家富貴」。周倉笑曰、「軍師木牛流馬、提杵人皆念木牛流馬経」。

ここでの周倉は、関羽と全く関わりなく、ただ司馬懿を嘲笑する役回りで登場する。またこの場面は関羽が亡くなって以後のことなので、古い物語では周倉は関羽に殉じていないのではないかと推察される。

11) 羅懋登『三宝太監西洋記』第七十五回

12) 『三国志平話』卷下

そもそも元代の三国故事が『三国志演義』によって編集される過程で、多くの架空の人物や故事が改変されていった。この改変により戯曲や『三国志平話』で活躍した多くの人物が淘汰されていった。袁術の「太子」袁襄、呉の道化役である于禁など、『三国志演義』では史実との整合性を欠くためか、全く活躍の場を与えられていない。

そのような中で、周倉や貂蟬といった幾つかの例外がある。これらの人物は架空の人物であるにもかかわらず、『三国志演義』に残されることになった。恐らく、あまりにその存在が広まりすぎており、登場させなければ逆に不自然さが生ずることになったものと考えられる。同様に、関羽の三男であるとされる関索も、同じく虚構の人物でありながら、後の三国故事に対して強い影響を保ち続けている。ただ貂蟬などは、雑劇や『三国志平話』では「呂布の妻」であったものが、『三国志演義』では意図的に改変させられてしまっている。

周倉の場合は、明代にはもう関帝廟において普遍的な存在となっていたため、これを欠くことは考えられなかったのであろう。先に見たように元代には関帝の脇侍としての地位が確立していたわけであるから、むしろそれに合わせて「関羽に殉ずる」ストーリーが作されたものと推察される。

ただ、『三国志平話』以前の周倉がどのようなものであったのか、或いはそれに比定できる人物なり神格なりが存在するのかについては、不明確な点が多かった。この中で胡小偉氏の「周倉考」は、困難な周倉の由来を大胆に探ったものである。次に胡氏の論に拠りながら、周倉の由来について考察してみたい。

### 3. 周將軍と周倉

胡小偉氏は、その論著である「周倉考」「周倉考補正」において、周倉の形象の来源が「周將軍」ではないかと指摘している<sup>13)</sup>。

我懷疑周倉之形象、其実源於宋金之際的另一神祇。元人『湖海新聞夷堅統志』後集卷二「神明門」周將軍条曰、「周將軍乃靈順廟部神。宋朝嘗以馬百匹、連鞍轡售於江北。索価大高。買者曰、馬有何奇而価如許。曰、吾馬能行水上。試之果然」。

胡氏はここで幾つかの「周將軍」を取りあげ、関帝との関係について論じていく。また「靈順

13) 胡小偉「周倉考」「周倉考補正」(『伽藍天尊・関公信仰研究系列』(科華図書出版公司 2005年) 199~244頁。



廟」の神、すなわち五顯大帝との関連についても言及する。確かに、周將軍信仰と周倉の関連については、あまり注意されてこなかった。

ただ、「周將軍」と称される神は幾つか存在する。まず浙江で盛んに祀られる「周孝子」が筆頭に挙げられる。『蘇州府志』には次のような記載がある<sup>14)</sup>。

靈惠廟、宋周孝子之神也。在常熟県治東南百步、本県土神、姓周、名客、生而事母至孝、平時急義凡郷間有患難、極意拯之。歿而告其母朱氏曰、「兒已而為神」。

周孝子神については、濱島敦俊氏・朱海浜氏による詳しい研究がある<sup>15)</sup>。濱島氏の述べるところによれば次の通りである<sup>16)</sup>。

周神は其の名の示すとおり、周姓の神である。常熟では県城・市鎮・村落全てに及んで最も普通の神とされるが、金総管、李王、あるいは次節に詳述する劉猛将とは異なり、その信仰圏はおおむね常熟県に限定され、他地域には僅かにしか見出されない、常熟固有の土神であり、しばしば「常熟の土神」と称される所以である。

ただ朱海浜氏の指摘によれば、常熟の周容以外にも、江南には他にも多くの「周孝子」が存在する。中でも「周宣靈王」として知られる周雄は、その後五顯神信仰に融合し、その配下の神として知られるようになった。また新城県の周徳驥もまた周孝子の一つとして発展していった。周孝子の信仰は、また水神信仰とも密接な関係があったという<sup>17)</sup>。

浙江地方では周孝子が周將軍とも呼称され、一定の信仰を有したとは考えられる。しかし、この神と関帝との関連性については接点が見出しがたい。胡小偉氏は五顯信仰と関帝信仰の関係について指摘するが、いまひとつ論拠となりにくい<sup>18)</sup>。

もう一つの「周將軍」は、所謂「天門三將軍」の一つである周將軍である。この神は唐・葛・周の三將軍として廟に祀られるものである。道教經典などにもしばしばその名が見えるが、や

---

14) 洪武年間『蘇州府志』卷十五

15) 濱島敦俊『総管信仰——近世江南農村社会と民間信仰』（研文出版 2001年）、朱海浜『祭祀政策与民間信仰変遷——近世浙江民間信仰研究』（復旦大学出版社 2008年）

16) 前掲濱島敦俊『総管信仰』47頁

17) 前掲朱海浜『祭祀政策与民間信仰変遷』83～97頁

18) 前掲胡小偉「周倉考補正」239～243頁



や古い層に属するものと考えられる。この神については筆者も、『三教搜神大全』の「呉客三真君」の記載をもとに論じたことがある<sup>19)</sup>。『三教搜神大全』の記載は次のようなものである<sup>20)</sup>。

昔周厲王有三諫官、唐・葛・周也。(略)三官諫曰、先王以仁義守国、以道德化民。(略)屡諫弗聽、三官棄職、南游於呉、呉王大悦。(略)後知厲王薨、宣王立、復歸周国。(略)三官既昇加封侯号、唐宏、字文明、孚靈侯。葛雍、字文度、威靈侯。周斌、字文剛、浹靈侯。宋祥符元年、真宗東封岱嶽、至天門、忽見三仙自空下。帝敬問之、三仙曰、奏天命護衛玉駕。帝封三仙曰、上元道化真君、中元護正真君、下元定志真君。

東嶽大帝とは関連性が高く、現在でも山東の岱廟にこの三將軍は祀られている。境界を守護する役割は他の地域にも広まっており、朝鮮半島のチャンスン(장승)の中には、「周將軍」「唐將軍」と記されるものもある。



ソウル民俗博物館にある「上元周將軍」の像

任東權氏はこの周將軍・唐將軍の意味を周王朝・唐王朝に由来するものと考えているようであるが、しかしこれは唐・葛・周の三將軍から来ているものと見なすのが自然であろう<sup>21)</sup>。

この周將軍が周倉に影響を与えているかどうか、これも判断が難しい。一般的に三將軍は三名で組み合わせになっている事例が多く、周將軍だけが独立して関帝の配下に入るという可能性は考えにくいのである。ただ、唐・葛・周の三將軍の像の形象が関羽・関平・周倉の三者の

19) 筆者『道教・民間信仰における元帥神の変容』(関西大学出版部 2006年) 220～222頁

20) 『絵図三教源流搜神大全(外二種)』(上海古籍出版社 1990年) 103～104頁

21) 任東權著・竹田旦訳『大將軍信仰の研究』(第一書房 2001年) 8～9頁

対応に影響を与えていることはあるかもしれない。

#### 4. 義勇武安王の協侍

そもそも、関帝像が描かれる場合、協侍に関平・周倉となったのがどの時点なのか見極めることが難しい。

関聖帝君と称される以前、関羽の称号は「崇寧真君」「義勇武安王」と変化していった。もっとも、義勇武安王とする像はあまり多く残っていない。

明に刊行された『三教搜神大全』の「義勇武安王」の挿絵については、确实に関羽・関平・周倉という組み合わせになっている。しかし、それが基づいたはずの元代の『搜神広記』の挿絵については、いまひとつ判然としない。



『三教搜神大全』と『搜神広記』の挿絵

武安王関羽の姿も、明清期のものとやや異なっていると考えられる。

サンクトペテルブルグのエルミタージュ美術館に所蔵する金代の義勇武安王像については、ボリス・リフチン（李福清）氏が紹介してより、多くの研究者がすでに論じている<sup>22)</sup>。

22) ボリス・リフチン（李福清）『関公伝説与三国演義』（漢忠文化公司 1997年）94～96頁



エルミタージュ美術館蔵「義勇武安王」像  
(前掲『関公全伝』より)

この図像は1909年にロシアの探検家コズロフが黒水城から発見したものである。この図に対しても様々な議論があるが、いまは周倉に対してのみ考えたい。

胡小偉氏の主張によれば、リフチン氏らが周倉であると想定する後部の青龍刀を持つ人物は、周倉であるか大いに疑わしいという<sup>23)</sup>。確かに、刀を持っているからといって単純に周倉とみなすのは問題があると言えよう。『搜神広記』の図となると、これはもうほとんど周倉とは考えにくい。

これにもう一つ材料を与えるのが、日本の京都大興寺に蔵する義勇武安王像である。伝によれば足利尊氏が守り神として携行したとされる像である<sup>24)</sup>。日本で最古の関帝像とされるが、この脇侍の二名は関平と関興とするのが一般的である。2013年春に大興寺において「京都春季非公開文化財特別公開」が行われ、この像を筆者も目睹することができた。聞いたところによれば「南宋武幹謹書」と額にあるとのこと、南宋期のものと推察される。

恐らく『搜神広記』の図も脇の二名は関平と関興であろう。この事例より、筆者は義勇武安

23) 前掲胡小偉「周倉考」200頁

24) 「京都の仏像：211関帝聖君像/京都」(『毎日新聞』Webサイトの記事  
<http://mainichi.jp/feature/news/20130502ddlk26040580000c.html>)

王の頃の脇侍は、むしろ関平と関興を置くのが常であったのではないかと推察する。

元の雑劇を見ても、関羽に従う者は関平であるのが一般的である。『単刀会』に周倉が出ているのは間違いないが、その他の雑劇では稀である。そもそも『単刀会』自体が、元刊本ではかなり内容が異なっている。『大破蚩尤』雑劇などでも、周倉はほとんど登場することはない。これらの点を考慮に入れると、やはり元以前の時期は、関帝の配下神としての周倉はまだ確立していなかったのではないかと想定できる。

## 5. 周昌と周倉

いずれにせよ「周將軍」と周倉の関連性は、どの資料からも認めにくいものである。

筆者は漢初の人物である周昌が、周倉の来源に当たるのではないかと考え、その点について『三国志平話』の注釈に書いた<sup>25)</sup>。いまその説を再提示してみたい。

道教経典『道法会元』には次のような記載がある。

『道法会元』 卷之二百五十九

地祇馘魔関元帥秘法

主法 聖師北極紫微大帝

主将 雷部斬邪使興風撥雲上将馘魔大将護国都統軍平章政事

崇寧真君関元帥 諱羽字雲長

(略)

身迎風雲 関平

炁貫玉清 関索

(略)

周昌將軍速現、速臨手捧宝刀

ここでは「周昌將軍」が関元帥の宝刀を持つ存在として描かれている。

『道法会元』は、正確な編纂時期は不明である。恐らく明初に最終的な編集が行われたと考えられる。ただ、内容に関しては北宋から明までの多くの道流の科儀書を含んだものとなっている<sup>26)</sup>。

25) 前掲二階堂・中川訳『三国志平話』299～301頁

26) 『道法会元』に含まれる道術については、筆者『道教・民間信仰における元帥神の変容』（関西大学出版部 2006年）を参照。ここでは一部の議論が重なっている。

その法術の中心になるのは「雷法」である。これは道教というより、民間の法師たちの道術であったものが道教に採用されたものである。この雷法を司る武神として、数多くの「元帥神」が設定されている。関帝も、この時期は道教側からは元帥神の一人と見なされていたものであった。関元帥はよく「酆都馘魔元帥」と呼称される。地獄の冥官という役割である。ただ、数ある元帥神の中でも地位は高く、「温・関・馬・趙」の四大元帥の一つと見なされている。四大元帥とは恐らく四天王を模して作られたもので、温瓊・関羽・馬勝・趙公明の四元帥を指す。

四大元帥は五行説に配当されると、「東方」温元帥、「南方」関元帥、「西方」馬元帥、「北方」趙元帥となる。そのため、色も温元帥は青、関元帥は赤、馬元帥は白、趙元帥は黒とされる。いまでも四大元帥の像を造る場合は、それぞれこの色を基本に作成する。関帝の顔を赤くするのは、この時の四大元帥の振り分けが残存したものはないかと推察する。

そもそも、関羽は北宋の頃まで神として扱われることは少なかった。その信仰が急速に発展したのは、「解州の塩池において靈験を顕して蚩尤を退治した」という伝説が広まってからである。この話を『三教搜神大全』には次のように載せる<sup>27)</sup>。

至祥符七年、解州刺史表奏云、「塩池自古生塩、収辦宣課。自去歳以来、塩池減水、有虧課程。此係灾变、敢不奏聞」。(略) 帝遣呂夷簡持詔就塩池禱之。是夜夢一神人戎服金甲、持劍怒而言曰、「吾乃蚩尤神也。奉上帝命、王此塩池。(略) 今朝廷崇以軒轅、立廟於天下、吾乃一世之仇也。此上不平、故竭塩池水」。(略) 王欽若奏曰、「蚩尤、乃邪神也。陛下可遣使就信州龍虎山詔張天師、可収伏此怪」。帝從之、乃遣使詔天師至闕下。(略) 天師奏曰、「臣拳一將最英勇者、蜀関將軍也。臣当召之、可討蚩尤、必成其功」。言訖、師召関將軍至矣、現形于帝前。(略) 如此五日、方且雲収霧散、天晴日朗、塩池水如故。皆関將軍力也。(略) 賜廟額義勇、追封四字王、号曰「武安王」。宋徽宗加封尊号曰、「崇寧至道真君」。

この記載を見るに、皇帝も張天師の側も、ほとんど関元帥を有力な神とは見なしていない。さらに『道法会元』巻二百五十九の「地祇馘魔関元帥秘法」の記載を見ると、関羽がそれまでほとんど無名の神であったことが看取できる<sup>28)</sup>。

昔三十代天師、虚靖真君於崇寧年間奉詔旨云、万里召卿、因塩池被蛟作孽、卿能与朕図之

27) 前掲『絵図三教源流搜神大全』109～111頁

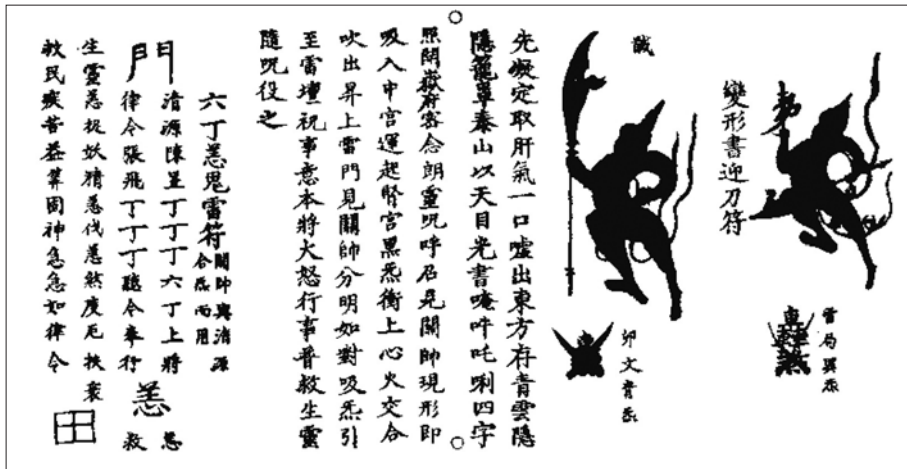
28) 『道法会元』巻二百五十九

乎。於是、真君即篆符文行香、至東嶽廊下、見関羽像、問左右。「此是何神」。弟子答曰、「是漢将関羽、此神忠義之神」。(略)即時風雲四起、雷電交轟、斬蛟首於池上。

すなわち、三十代天師張虚靖は、関羽の像を見て「これは誰か」と尋ね、弟子が「これは漢の将の関羽であります」と答えているのである。後世の関帝信仰の盛んな様子からは想像もできないほどの扱ひである。

そもそも元帥神自体、様々な出自のものが雑多に組み合わされているものである。趙公明のように六朝時代から道教の神として存在していたものもあるが、むしろそれは例外である。馬元帥や殷元帥のように、密教の神から発展して道教の神と化したものもある。さらに、関元帥のように過去の歴史上の人物を引き込んだものもある。一方で、全くの虚構から作為したものもある。

もっとも、過去の武将たちをどう選択したかについては、ある程度の方向性があったと考えられる。恐らく『道法会元』においては、「忠義に殉じた」ことを重視しているように思われる。関羽が選ばれたのも、まずその忠義を強調してのことと考える。



『道法会元』関元帥秘法

たとえば、関羽以外の元帥神を見てみると、卷二百五十八「東平張元帥專司考召法」にその名が見える「張巡・許遠・雷万春・南霁雲」がある。彼らはいずれも唐の安祿山の乱の時に屈せずして戦い、忠義に殉じた者たちである。また卷二百三十五「正一玄壇飛虎都督趙元帥秘法」には、趙元帥の配下に「伍子胥・白起」がある。これも忠義を懐きながら、志半ばに亡くなった者たちである。



むろん、一般的に活躍しただけの武将も多く含まれる。しかし、関羽もそうであるが、元帥神には「業の半ば」で恨みをもって亡くなった者が多く、恐らく民間ではその「怨霊」としての力を恐れていたと考える。雷法ではその怨霊としての威力をむしろ重視して、これらの神を元帥神に据えたと考えられる。

周昌もまた、やはり忠義のために尽くした経歴を持つ人物である。『史記』には次のような伝が載せられている<sup>29)</sup>。

周昌者、沛人也。其従兄曰周苛、秦時皆為泗水卒史。(略)沛公立為漢王、以周苛為御史大夫、周昌為中尉。漢王四年、楚圍漢王滎陽急、漢王遁出去、而使周苛守滎陽城。楚破滎陽城、欲令周苛將。苛罵曰、「若趣降漢王。不然、今為虜矣」。項羽怒、亨周苛。於是乃拜周昌為御史大夫。(略)昌為人彊力、敢直言、自蕭・曹等皆卑下之。(略)是後戚姬子如意為趙王、年十歲、高祖憂即萬歲之後不全也。(略)於是徙御史大夫周昌為趙相。

周昌は漢の高祖劉邦に仕えて御史大夫となった。剛直な人柄で、高祖に対しても遠慮することはなかったという。趙王の身を案じた高祖によって趙王の相にされる。呂后も周昌を憚っていたが、後に謀略のため趙王は殺される。周昌はその後、病と称して朝廷に出ることはなかった。その忠義と剛直という点は、先に見た元帥神の幾人かと重なるところがある。

もっとも、周昌よりはその従兄である周苛の方が、事績的にはより元帥神にふさわしいようにも思われる。実際にはこの兩名の事績が混同されているとも考えられる。

むろん『道法会元』の側が、単純に「周倉」を「周昌」に書き間違ったという可能性もある。ただ『道法会元』で周昌の名が見えるのは関元帥の箇所にとどまらない。卷二百五十六の「地祇温元帥大法」にもその名が見えている。一方で「周倉」と記した例は『道法会元』には全く見えない。

『道法会元』で目立つのは、むしろ唐・葛・周の方の「周將軍」である。ただこの場合はほとんど「下元周將軍」と書かれるのが一般的である。すなわち、周倉でもなければ周昌でもない。明らかに別の神として扱われている。

また『道法会元』においては、杜撰とも言えるほど適当に人名を組み立てることもある。そのため、「周昌」が漢初の周昌を指すのかについても、やや疑問が残る。

さらに『道法会元』のこの記載自体が、どの時期の記録であるか、判然としない。筆者は関

29) 司馬遷『史記』卷九十六張丞相列伝「周昌」の条



羽の称号から、記録が元ではなく、宋の時期のものだと推察するが、確証があるわけではない。

このように様々な問題を抱えながらも、筆者はこの『道法会元』の記載が、周倉の古い形を示すものではないかと考える。本来漢初の人物であった周昌が武安王の配下神として固定し、しかし歴史物語としてはその名称をそのまま使うわけにはいかず、別に「周倉」という発音の似た人物を作為せざるを得なかったのかとも推察する。もちろん、今後とも関連する資料を調査し、その他の可能性についても探っていきたい。